〈登壇者論文〉

象徴権力としてのスポーツと「体育会系」アイデンティティの特徴
ブルデュー理論からみた男性支配と体育会系ハビトゥス

Sports as Symbolic Power and Habitus of Sports-oriented Students

片岡栄美（駒澤大学）
Emi KATAOKA (Komazawa University)

Abstract

This paper examines values, attitudes, and cultural capital among sports-oriented college students based on quantitative survey data in Japan, using Bourdieu's theory of masculine dominance and symbolic boundaries.

Sports-oriented college students show non-democratic values regarding gender roles and attitudes of masculine dominance among both male and female students. Their communication skills are high and most of male sports-oriented students are power-oriented. Male sports-oriented students, in particular, exhibit authoritarian personality traits and traditional conservatism relative to other types of college students. They show political indifference, trust in the information provided by mass media and generalized trust for others, so they are 'naive,' not doubting the present social regime, and they are less apt to notice current social problems and contradictions in society. Also, the cultural capital of sports-oriented students is lower than that of other students. Their values and attitudes, in other words, their habitus might embody the conservative and non-democratic class fraction of Japan in the near future.

抄録

本研究は，ブルデューの男性支配と象徴権力の理論を用いて，日本の大学生におけるスポーツ嗜好のアイデンティティをもつ学生の価値，態度，文化資本を，量的な調査データに基づき明らかにした．

体育会系アイデンティティの保持者は男女ともに，ジェンダー役割意識に関する非民主的価値と男性支配的価値を示した．彼らのコミュニケーション能力は高く，かつ男子体育会系の大半が権力志向でもある．とくに男性の体育会系は権威主義的価値観や伝統重視の価値観をより強く持っている．かれらは政治的な無関心を示す傾向が強く，マスメディアの情報を信頼しており，また一般的他者への信頼も高い．それゆえ，かれらは現在の社会体制を疑うことはあまりなく，社会の問題や社会の矛盾に気がつきにくいナイーブな存在でもある．また体育会系学生の文化資本は，他の学生よりも相対的に低かった．これらの価値態度，いいかえれば，ハビトゥスは近い将来の日本の保守的・非民主的な階層フラクションを体現するものである．

キーワード : 体育会系，アイデンティティ，男性支配，ハビトゥス，象徴暴力，スポーツ

1．問題設定

子ども期から青年期において，スポーツ活動は青少年にどのような人格的影響を与えるのだろうか．本稿は，大学生における「体育会系」アイデンティティを分析対象とし，「自分は体育会系である」という体育会系自認が，青年期の価値観（権威主義的パーソナリティ，上昇志向，他者信頼，政治的無関心やポピュリズム，排外意識）や社交性，友人関係とどのような関連性をもつのかを，調査データから明らかにする．

この分析を通じて，「スポーツ」という一つの制度が，いかにジェンダー構造（Connell, 1995）を永続化させる作業をしているのかを，象徴権力の視点から問い直したい．その際に，フランスの社会学者ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）による象徴的支配の理論と概念，すなわち「実践（プラティック）」「ハビトゥス」「象徴的暴力」「象徴的利益」「知覚・評価図式[1)]」等の概念を用いて，スポーツ文化のジェンダー化とアイデンティティについて検討する．

支配には，「見えやすい」支配だけでなく，「見えにくい」支配，言いかえれば支配されている人さえも気づかない象徴的な支配や差別の問題がある．その一つが男性支配であるとブルデューは述べる（Bourdieu, 1998）．

2．なぜ男子はスポーツで，女子は文化芸術なのか？

子ども期から青年期の学校外活動には，節のタイトルに示したような一種のジェンダー構造が存在する．筆者は過去に子どもの社会化経験についての母親調査から，子ども時代にスポーツ活動をする子どもと，そうでない子どもの家庭背景の違いを明らかにし，スポーツ活動の社会的格差について明らかにした（片岡，2010）．その中で学校外活動において，スポーツ体験が男子に多いこと，女子では文化芸術体験の比率が男子よりも相対的に高くなることが明らかになっている．すなわち「男子はスポーツで，女子は文化芸術」を経験しやすい構造がある．問題は，なぜスポーツや文化活動といった社会化経験でのジェンダー差が明確に存在するのか，ということである．

3．文化定義のジェンダー化

男性がスポーツ嗜好で，女性は文化芸術嗜好であるのは成人でも同じである．とくにハイカルチャーである正統文化活動への女性の参加率は男性より高いことが明らかにされている（片岡，2000，2003）．

さまざまな文化活動やスポーツ活動に対する人々の意味付与について調査した研究（片岡，2005）によれば，「男の子にはスポーツを，女の子にはピアノなどの文化芸術活動をしてほしい」という意見が量的調査でも質的調査でも明確に示された．

この現象を，図1に示す概念間の関連図式を用いて説明しておこう．片岡は諸活動が示すジェンダー差の背景に，「文化定義のジェンダー化」，すなわち「日常的実践の対象である文化活動に対し，人々がジェンダー・バイアスを伴う意味付与や意味解釈を行なうこと」があると述べる．種々の文化実践が，「男らしさ」や「女らしさ」の表象として解釈されており，これが社会的な「通念（ドクサ）」となって人々に共有され，それゆえ＜自然なこと＞として一般の人々に認識されている状態にある．つまり文化への意味付与がジェンダー化しているのである．

それゆえスポーツは男性向きの活動として「望ましい」と意味付けられ，多くの人々の知覚・評価図式＝ハビトゥスとして共有されていた．そして子育て実践の場面では，男子のほうが女子よりも子ども時代から，スポーツ体験をより奨励され，男子の多くがスポーツの習い事や活動を体験しているのである．

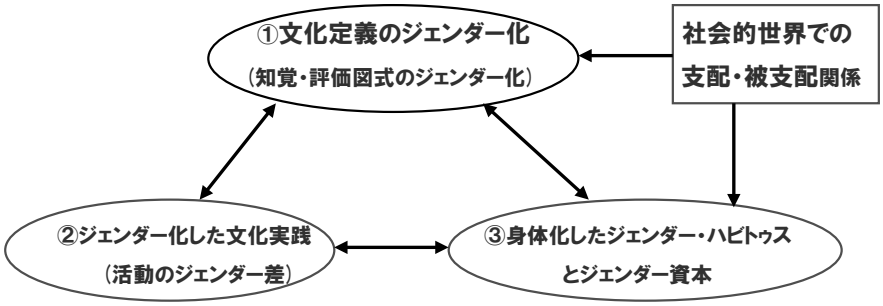

図１　概念間の関連図式
（本図は片岡（2005）で提示したものを一部改変したもの）

言いかえれば，人々が諸活動を評価する際に作動する＜知覚･評価図式＞がジェンダー化している．この「ジェンダー化した文化定義」はハビトゥスとして内面化され，多くの人々が共有する知覚・評価図式となっている．多くの人々が，そうしたハビトゥス（ジェンダー化した文化定義という知覚・評価図式）にもとづいて，特定の文化活動のイメージをジェンダーと結びつけて拡大再生産する．そして，自らもその文化定義に基づいて実践しているのではないか．

もちろんスポーツ活動や文化活動のすべてが，ジェンダーと結び付けて解釈されることはありえないが，ある特定の活動に限って言えば，ジェンダーと強く結びついていることも事実である．例えば，片岡（2005）が明らかにしたインタビューの事例では，次のようである（再録）．

「女の子にスポーツ新聞を読んでほしくない．女の子は優しく品がよく周りの人を明るくする人間になってほしい」（男性 23 歳　事務　大卒）

「女の子には美術・絵画鑑賞をしてもらいたい．こういうのを通じて情緒豊かな人になってもらいたいから．男の子にはそういうものよりもスポーツ等を沢山して，　少しの事じゃ物怖じしないような，たくましい子になってほしい」（女性 47 歳　専業主婦　短大卒）

「女の子には茶道・華道をやってほしい．精神的にたしなみ，礼儀を身に付けるために精神修養してもらいたいから．パン・菓子作りも，女の子は家庭に入ると食事の用意とかしなきゃいけなくなるから調理の方法と料理の仕方を学んでほしい．しかし男子はパン・菓子作りをやらなくてもいい．機会もないし別のことに集中してほしい．差別みたいになるかな？ プロ野球はやってほしい．過酷な対決を見て，自分も負けないように生きていけるよう何かを見つけてもらえればいいと思って．男の子はスポーツを通して礼儀とかたしなみを会得してほしい（男性 60 歳　技術職　高校卒）

4．スポーツと性の秩序の生産・再生産

4－1．カテゴリーの再生産

では，スポーツはどのように象徴的権力として，性差別に関与し，性の秩序の生産や再生産に加担しているのだろうか．

スポーツをする行為者あるいは身体（＝主にスポーツ男子）とそれを支える文化的な女子を，生産あるいは再生産することは，ブルデューの言葉を借りれば「社会的世界を組織するカテゴリーを再生産している」ということができる．

いいかえれば，それは「知覚・評価図式のカテゴリー」と「社会的なカテゴリー」の二重の意味で

のカテゴリーを再生産することである.

これはあくまで理念型として挙げているが,「スポーツ男子（スポーツをする男性)」と「文化的女子（文化的に洗練された女子)」というカテゴリーは，人々の認識図式の典型的な類型として，違和感なく理解されていく．男女差は縮小したともいわれるが，この典型例がどのくらい自明で自然かというと，編み物や刺繍が趣味の男子や筋肉美を競う女子に対して，人々が抱くであろう漠然とした違和感がそれを示している.

4－2. 男性も象徴支配の犠牲者である

「スポーツをする男性」というのは，スポーツによってその男性的な評判すなわち男らしさや名誉といった象徴的な価値を高めている．それゆえスポーツのできる男子には，名誉と賞賛が与えられ，人気が出たり，あるいは男らしいと賞賛される．しかしブルデューが述べたように，男性もまた象徴的支配の犠牲者でもある．つまり「男性支配が支配者側の男性にもたらすジレンマ」(Bourdieu,1998=2017, pp.110）がある.

男性は, 子ども時代からの社会化の過程で, 支配的ハビトゥスを持つように仕向けられることによって，男性的な思考や行動を求められるからである．これは男性にとってはしばしば重荷ともなり，スポーツのできない男性，あるいは弱い男性は，男らしさとは無縁の存在として集団からの尊敬や承認をえられない，あるいは面目を失う．こうした価値判断は，人々の無意識的な価値判断基準，言い換えれば知覚･評価図式として作動する．これらはジェンダー研究者が明らかにしてきたことでもある。

4－3. 女子には「スポーツよりも文化芸術」の意味

女性にスポーツがそれほど奨励されていないという調査結果（片岡 2005，ベネッセ教育総合研究所 2009）が示す現実は，スポーツが女性にとって象徴的利益をあまりもたらさないからだと解釈することができる.

つまり男性的な社会秩序のもとにある社会においては，非支配的なハビトゥスとそれに合致した身体をもつ女性はより賞賛されるが，その逆に男性以上に強い力と身体を持つ女性は，たとえば「霊長類最強女子」と呼ばれ，男性の性的対象とならない存在として，不名誉と嘲笑の対象にされるような現実がある.

なぜなら女性の象徴的利益は,「消極的であることの美徳」であり,「自己犠牲や諦め」, 優雅な身体, 純潔，強くないこと，攻撃的でないことである（Bourdieu, 1998）からである．そして文化的に洗練されること（文化資本）は，女性らしさの資本（ジェンダー資本）の重要な一部分となって，女性に女らしさという象徴的利益をもたらしている（片岡，2000, 2003).

いいかえれば「従属者としてのハビトゥスが割り当てられる女性」には，その対局のスポーツ的ハビトゥス，支配的ハビトゥスはふさわしくないと考えられるのである.

5. スポーツという象徴権力，象徴的支配はなぜ続くのか

ブルデューによれば，スポーツは象徴支配の実践である．つまり男性支配という象徴的暴力を体現しているのがスポーツである．ただし全種目ではなく，例えばフィギュアスケートは女性的とみなされている.

何が男性支配という象徴的暴力や象徴的支配を永続化させているかについて，ブルデューは「家庭であり，学校であり，マスコミといった諸制度である」と述べる．さらに筆者の見解として，大学と

いう<場(シャン)>でも，学生たちは，男性支配を正当化する体育会系ハビトゥスを温存することに貢献する「体育会系」というカテゴリーを作動させ，互いを弁別し，ヒエラルキーを形成していると考えている．

この体育会系ハビトゥスが優勢となるのは体育会系部活動だけではなく，社会においては，例えば「体育会系ハビトゥスの濃度の高い」会社や組織がある[2)]．体育会系ハビトゥスの保持者は組織の生産性に寄与しているかもしれないが，同時に男性支配的で成果主義，競争主義的な組織文化や男性優位の格差構造が継続的に再生産されているともいえる．

なお象徴的暴力の低減について，ブルデューは悲観的である．一部を紹介しておこう．

> 「象徴的暴力は，意志の力や努力によって解放できるものではない．・・・象徴的暴力を，意識と意志という武器だけで打ち負かせると信じるのは錯覚である」「象徴的暴力は啓蒙するだけで治るようなものではない．なぜならそれはハビトゥス（性向）にもとづくものなので，性向は支配構造の産物であり支配構造に合わせて調節されている以上，女性という非支配者は，支配に対して共犯関係にある」（Bourdieu, 1998）．

また女子がスポーツ男子を賞賛したり，スポーツで「主役」となった男性を補助することに生きがいを覚える（女子マネージャーなど）ことが多いのは（高井，2005），女性も男性支配という象徴暴力への「共犯関係」にあるからである．スポーツが男性支配の価値と関連するという点については，これまでも多くの研究蓄積があり，国内の代表的研究としては，伊藤（1999），飯田・井谷編（2004），多賀（2001），羽田野（2004），中村（2007），西山（1998）などがある．

6. データ

本稿で使用する調査データは，片岡が 2017 年に実施した「大学生の文化活動に関する調査」である．有効サンプル数は 383 票で，内訳は男子 179 票，女子 203 票，不明 1 票である．大学は全部で 5 校であり，ランク別に高偏差値大学 1 校（62.5），中位偏差値大学 3 校（うち 1 校は地方県で偏差値 50 前後），やや下位偏差値の大学 1 校（偏差値 40.0）である．中位 3 校のうち理科系学部が 1 校含まれている．なお偏差値は，河合塾の 2017 年版の数値に従っている．

この調査の特徴は，以下で示す価値意識や態度項目のほとんどすべての変数において，親の学歴や職業などの社会階層差が見いだせなかったことと，大学ランクによる差異もほとんどの項目で統計的に有意ではなかったということである．学生の出身階層や大学間の差異が存在せず，代わりにアイデンティティ自認による差異が明確に現れた点が特徴である．

アイデンティティ自認については，「自分は○○である」という問を作成し，体育会系のほか，オタク，ストリート系，サブカル系，草食系，パリピ系など合計 8 種類のタイプにそれぞれどの程度当てはまるかを質問した．回答選択肢は，「そう思う」～「まったくそう思わない」「わからない」の 5 択から 1 つを選んでもらった．

このアイデンティティ自認に関する分析は，片岡（2018）において，象徴闘争や象徴的境界の概念を用いて詳細な分析をおこなっているので，そちらを参照されたい．

体育会系を自認する学生の比率は，全体で 41.6％であり，図 2 に示すように男女で有意な差異はなく，男子 43.9％，女子 40.8％が自らを体育会系と位置付けていた．

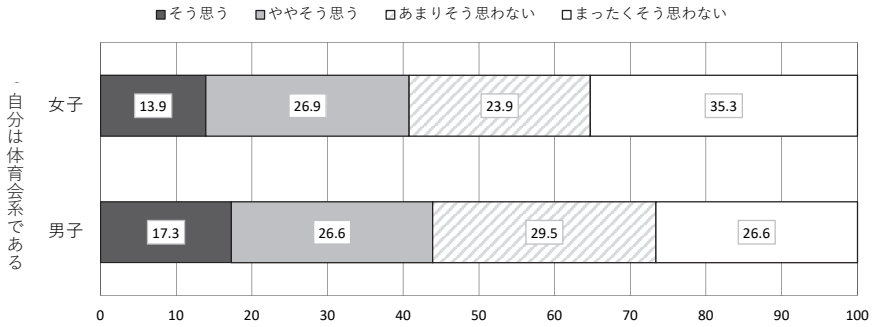

図２ 「体育会系」アイデンティティ（男女差なし）

7. 体育会系アイデンティティをもつ学生の属性

体育会系であるというアイデンティティ自認をもつ学生の属性を多面的に検討した結果，以下の点が明らかになった．

(1) 学部別では，社会学系には体育会系は少なかった（社会学系学生のうち 33.3％が体育会系を自認）．おそらく学部学科を選ぶ段階で，すでに将来の進路を視野にいれた学部学科選択が行われている可能性があることや，そこに出身階層による野心の持ち方の違いも加わるので，学部学科別に体育会系の比率は異なってくると考えられる[3)]．学部学科による学生層の違いについては，ジョン・マイヤーがいうチャーター効果であるとも言えよう（Meyer, 1972, 1977）．

(2) 家族や家庭背景の変数のうち，きょうだい数のみが関連をもち，きょうだい数が多い学生ほど，体育会系自認の割合が有意に高かった．具体的には，体育会系と回答した者の比率は，一人っ子で 27.5％，二人きょうだいで 43.1％，三人きょうだいで 42.9％，四人以上のきょうだいで 63.2％であった．家族人数との相関が示唆することは，体育会系アイデンティティは集団の中で形成されるということである．

(3) 体育会系部活への参加は，体育会系のアイデンティティ自認と強い関連性をもつが，絶対的な条件とはいえない（表 1）．

表１　体育会系部活動と体育会系アイデンティティ

		体育会系アイデンティティ		合計
		そう思わない	そう思う	
体育会系部活動への参加	非参加	193 61.3%	122 38.7%	315 100.0%
	参加	20 37.0%	34 63.0%	54 100.0%
合計		213 57.7%	156 42.3%	369 100.0%

p<.001

8.「体育会系」学生のハビトゥス

どのような学生が自らを体育会系と判断するかについては，片岡（2018）がその基準を決定木分析で明らかにしている．それによれば，表１でも示したように，体育会系部活や体育会系サークルに参加していることが体育会系アイデンティティの絶対的要件ではなく，むしろ，友人関係などの関係性に表れる社交性やコミュニケーション能力と強い関連性をもっていた．さらに価値観では権威主義や

政治的無関心，ジェンダー意識等に強い関連性が見出された．以下では，その知見も踏まえながら，「体育会系」自認の学生のハビトゥスを明らかにする．

結論から述べると，「体育会系である」と自認する大学生は，他の学生と比較して，非常に明確な特徴が存在した．とくに体育会系男子に権威主義，政治的無関心，読書文化資本の弱さ，異質な他者との交流の拒否，他者信頼の高さ，性別役割分業意識の強さ，社交性，リーダー性の高さ等が見出された．また男女で異なる価値観の傾向を示したこともあり，以下では男女別に分けて，体育会系アイデンティティの特徴を明らかにしていく．

以下の分析では，「自分は体育会系である」という問に対し，「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生を「体育会系」とし，「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」「わからない」と回答した学生を「非体育会系」として２分割した．クロス集計結果を行った図表に示された検定結果は，すべてカイ二乗検定（両側検定）であり，男女それぞれについて，体育会系と非体育会系の差異が有意かどうかを検討した．

８－１．関係性とコミュニケーション能力

体育会系アイデンティティを持つ学生が非体育会系学生ともっとも異なる特徴の１つが，人間関係面での優位性である．調査では，友人関係を中心に，「誰とでも仲良くなれる」「親しい友人の数は多い方だ」「少人数の友人より，多方面の友人といろいろ交流する」について質問し，「あてはまる」～「あてはまらない」の４段階で回答してもらった．

以下に示す図では，「あてはまる」と「少しあてはまる」の回答合計を男女およびタイプ別に表示している．

友人関係や人間関係の活発さ（図３，図４）において，体育会系は非体育会系に比べて有意に高い．また図５に示す，「多方面の友人と交流する」という点では，男子で体育会系の53.3％が肯定したが，非体育会系ではわずかに16.8％のみが肯定しており，多様な人間関係を結ぶことができるのが，体育会系男子の特徴であることがわかる．しかし女子ではその差が有意でなかった．

以上から，体育会系アイデンティティをもつ者は社交性が高く，人間関係を良好に保つコミュニケーション能力に優れていると推測することができる．

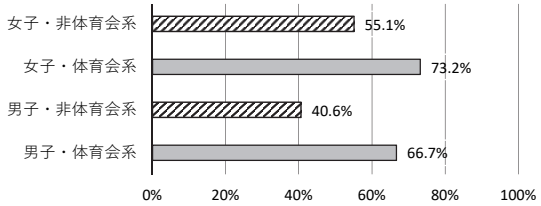

図３　誰とでもすぐに仲良くなれる
（女子 p<.01，男子 <.001）

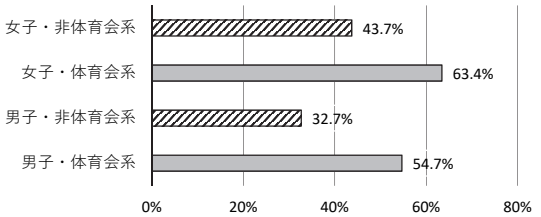

図４　親しい友人の数は多い方だ
（女子 p<.01，男子 p<.01）

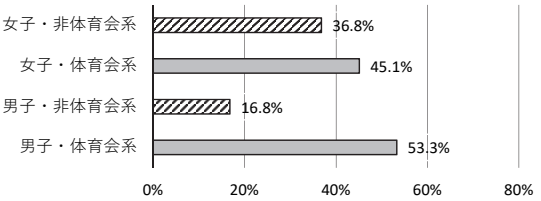

図５　少数の友人より、多方面の友人といろいろ交流する
（女子 n.s.，男子 p<.001）

8－2．非民主的価値：ジェンダー意識，権威主義，伝統主義

体育会系アイデンティティを持つ学生は，（非）民主的価値観に対してどのような態度を示すのだろうか．昨今のスポーツ業界におけるハラスメントや暴力行為を容認することへの告発が続いている背景に，スポーツの世界にはいまだに他と比べても，非民主的で古い価値観である伝統主義，権威主義，性役割分業観を肯定する素地が根強くあるのではないだろうか．

図６は，ジェンダー意識の中でも伝統的な価値観を表す，性別役割分業観（一家の経済は男性が責任をもつべきである）への肯定率を表している．非体育会系よりも体育会系，女子より男子が性役割分業を肯定していることが明らかとなっている．体育会系男子の肯定率は48.6％，男子・非体育会系21.9％，女子・体育会系17.3％，女子・非体育会系9.4％と大きな差がある．体育会系アイデンティティはこの性役割分業観と強く結びついていることがわかる．また図７は家事分担意識であり，「共働きでも，家事は女性が主に分担するべきだ」を肯定する比率である．ここでも体育会系アイデンティティをもつ男子学生の肯定率が有意に高いが，女子では有意な差はない．

図８は，権威主義の１つである「権威がある人々にはつねに敬意を払わなければならない」への肯定率を示す．ここでも男子・体育会系のみが，有意に高い肯定率（男子体育会系42.7％＞男子非体育会系24.7％，p<.05）を示している．コーチや監督といったスポーツ指導者のみならず，権威に対して従順であるのが体育会系アイデンティティを構成する重要な要素であることがわかる．

図９は，権威主義の要素の１つでもある「伝統主義」（以前からなされてきたやり方を守ることが，最上の結果を生む）である．女子では有意差は生じなかったが，男子では体育会系アイデンティティ保持者ほど高い肯定率（17.3％）を示し，男子・非体育会系（8.2％）の倍以上である．

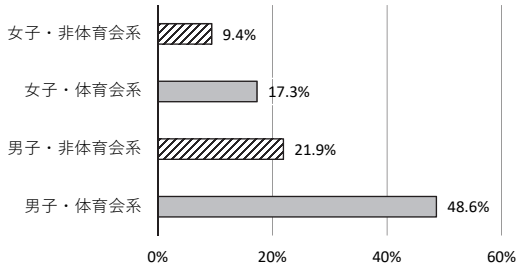

図６　性役割分業（女子 n.s.，男子 p<.001）
一家の経済は、男性が責任をもつべきである

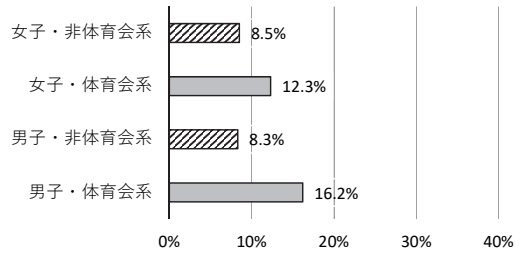

図７　家事分担（女子 n.s.，男子 p<.05）
共働きでも、家事は女性が主に分担するべきだ

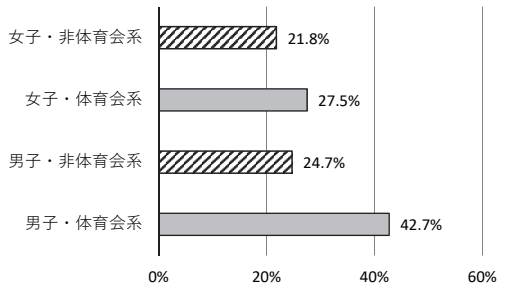

図８　権威ある人への敬意（女子 n.s.，男子 p<.05）
権威ある人々にはつねに敬意を払わなければならない

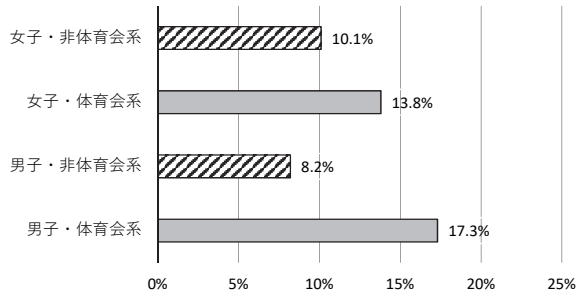

図９　伝統主義（女子 n.s.，男子 p<.01）
以前からなされてきたやり方を守ることが、
最上の結果を生む

以上から，非民主的価値は，体育会系の男子においてもっとも強く内面化されていることが明らかになった．女子・体育会系は，権威主義の程度は男子ほど高くはないが，性役割分業を受け入れる比率がやや高く，たとえば女子マネージャーのような存在への肯定にもつながっていくのではないだろうか．

8－3．リーダー性，競争意識，上昇志向

体育会系アイデンティティを持つ者は，集団の中の支配的ハビトゥスを持ち，集団内でリーダーになったり，勢力面で優位な立場にあるのではないだろうか．

まずリーダー性については，「クラス・サークル等の団体の中で，リーダーシップを発揮する」かどうかを問うた．図 10 が示すように，男子で体育会系がリーダー性を発揮している（男子体育会系 38.7％＞男子非体育会系 13.7％）ことが明らかである．女子では体育会系アイデンティティはリーダー性とはほとんど関連をもたないが，男子の場合は体育会系が集団内でリーダーとなっていることが明らかになった．

また競争主義的価値も体育会系アイデンティティを構成する要素であり，図 11 に示すように男女ともに，体育会系アイデンティティを示す者ほど「他人との競争に勝つことは重要だと思う」を肯定している（男子体育会系 78.8％＞女子体育会系 62.2％＞非体育会系男子 56.8％＞非体育会系女子 44.9％）．ここでも女子より男子のほうが，肯定率は高い．

上昇志向（上の地位をめざしたい）でも図 12 に示すように，男子体育会系では 70.7％が上昇志向であり，男子非体育会系 44.2％と数値は大きく異なっている．女子も同様の傾向にあり（女子体育会系 47.6％＞女子非体育会系 31.4％），体育会系アイデンティティをもつ者は上昇志向が強いといえる．

以上をまとめると，体育会系アイデンティティを持つ者は，競争志向で上の地位をめざす上昇志向のタイプであることがわかる．同時にリーダーシップも発揮していることから，学生集団の中では積極的で支配的な地位にあると考えられる．今回の調査では権力の視点から分析できないが，意識面では学生集団内での地位は高いと推測することができる．この点については，今後の課題である．

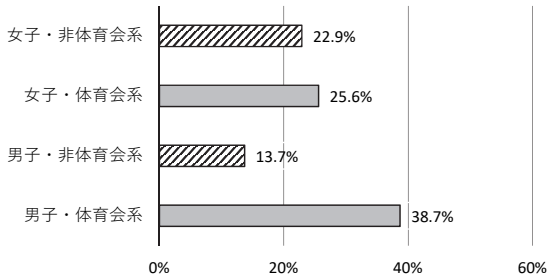

図 10　リーダー性（女子 n.s.，男子 p<.001）
クラス・サークル等の団体の中でリーダーシップを発揮する

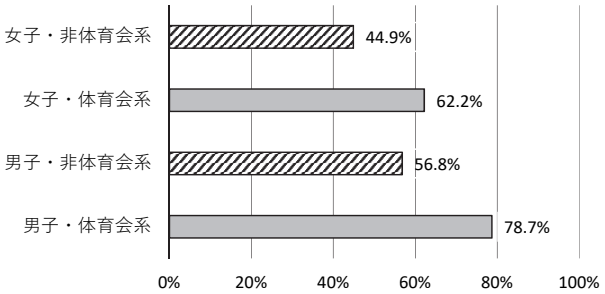

図 11　競争主義（女子 p<.05、男子 p<.01）
他人との競争に勝つことは重要だと思う

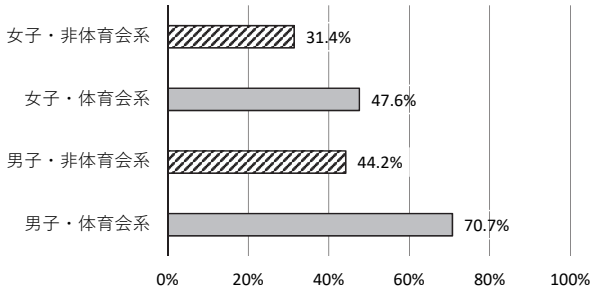

図 12　上昇志向（女子 p<.05，男子 p<.001）
上の地位をめざしたい

8－4．政治的無関心とマスコミへの信頼

体育会系を自認する学生は，どの程度，政治的な事柄に関心を持っているだろうか．またマスコミやテレビの情報への信頼度はどの程度であろうか．後者の問題は，ポピュリズムとの関連性で考察することができる．

政治に対する意識としては，「政治のことは難しいので，理解できなくてもよい」（政治的無関心）と「政治に熱を入れるよりも自分の仕事に精を出した方が良い」（政治より自分の仕事中心）の2項目について尋ねた．政治的無関心に関する結果は図13に示す通りであり，男女ともに体育会系を自認する者の肯定率が有意に高かった．なかでも体育会系男子は20.0％が肯定しているが，非体育会系男子では7.2％で約3倍の開きがある．

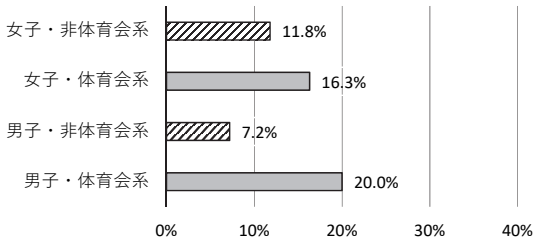

図13　政治的無関心（女子 p<.10，男子 p<.05）
政治のことは難しいので、理解できなくてもよい

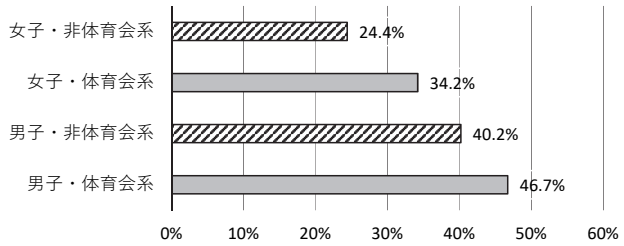

図14　政治より自分の仕事（女子 p<.05，男子 n.s.）
政治に熱を入れるよりも自分自身の仕事に精を出した方が良い

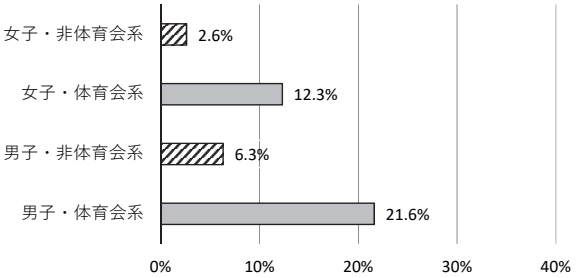

図15　マスコミ情報への信頼（女子 p<.05，男子 p<.001）
日本のマスコミやテレビの情報は信頼できる

さらに図14に示すように，「政治より自分の仕事」という意識への肯定率は，男子体育会系で46.7％，男子非体育会系で40.2％，女子体育会系で34.2％，女子非体育会系で24.4％となり，女子よりも男子に「政治より自分の仕事」という意識が強く表れていた．しかし男子では体育会系と非体育会系での有意な差とまではいいきれない．また男子体育会系が，政治よりも仕事を重視することには変わりはない．

図15では，テレビやマスコミ情報への信頼は，男子体育会系でもっとも高くなることが明らかである．制度への信頼が高いとも推測できる．

以上をまとめると，体育会系とは，政治や社会への関心が相対的に低く，政治のことを考えるよりも，自分の所属する組織や集団での役割を重視して，かつそこでの権威関係を重視しながら，社会に疑いをあまり持つことなく生きるタイプであることがわかる．

8－5．他者信頼と異質な他者への排他性

他者への信頼感については，ソーシャル・キャピタルの要素でもある一般的信頼（generalized trust）についての質問を行った（Putnam 1993, 2000）．一般的信頼の質問，「ほとんどの人は信頼できる」への回答を比較した結果が図16である．男子の場合，体育会系と非体育会系で大きな差があり，男子体育会系は44.6％が他者への一般的信頼を示したが，男子非体育会系では18.8％と少なかっ

た．女子では体育会系であることで有意な差は生じなかった．

男子の体育会系で他者信頼が強いということは，スポーツを通じて互いに切磋琢磨する関係性，あるいはチームで勝利をめざす時に相互の信頼がなければ達成できないというスポーツ文化とも関連していると考えられる．スポーツ体験やスポーツ文化に関わる経験が，若者の他者信頼を醸成するのかどうかについては，ここでは推測の域でしかないが，その可能性を強く示唆する興味深い結果であるといえよう．

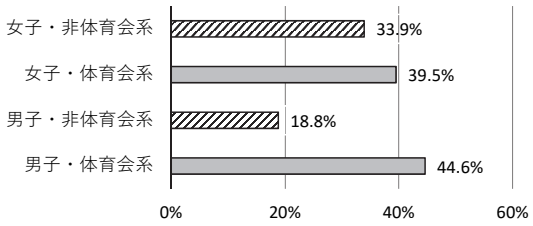

図 16　他者信頼（女子 n.s.，男子 p<.001）
ほとんどの人は信頼できる

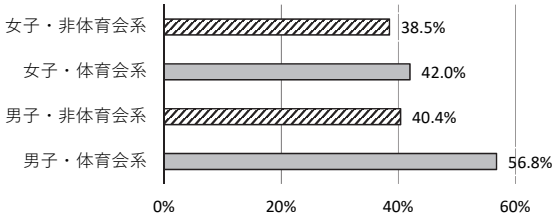

図 17　異質な他者への排他性（女子 n.s.，男子 p<.01）
価値観や考え方の合わない人とは、付き合いたくない

次に,「異質な他者への排他性」については，かつて片岡（2009）が「お受験」親の特徴として指摘した際に作成した質問項目を使用した．それは「価値観や考え方の合わない人とは，付き合いたくない」という質問であり，全体では約 4 割の学生がこの意見を肯定している（図 17）．しかしその中でも，とくに男子体育会系の学生が，かなり高い比率（56.8%）で肯定しており，異質な他者への排他性が高いという結果を示したことは，特筆すべきことであろう．なぜなら最も「他者への一般的信頼」が高い男子体育会系において，同時に異質な他者への排他性が示されるからである．

数土（2013）によれば，一般的信頼は民主主義の度合の高い社会と低い社会の両極端においてその比率が高くなるという．民主度の高い社会では，人々はリスクを引き受けながらも公正感覚に基づき，他者を信頼する．しかし民主度の低い社会では，権威主義に依拠しながら，リスクを回避するタイプの信頼が多くなるという．

この知見を今回の結果に重ね合わせて考察すると，先にみたように権威に従順な体育会系アイデンティティをもつ学生は，みずからが所属する集団やそのメンバーへの信頼は高く，その所属集団は伝統主義や権威主義に彩られた社会界である．ジェンダー意識にも反映されていたように，体育会系アイデンティティを自認する学生たちに共通する特質は，古い体質の文化を生きていること，言いかえれば，体育会系とは民主度の低い界に所属し，集団的で文化的な同質性も求められる集団にいる．その中で，リスクを回避しつつ，権威主義的であることで他者への信頼は高くなるのではないだろうか．このように一般的他者への信頼の高さと異質な他者への排他性の両方が同時に存在する点が，体育会系を表す特徴といえるだろう．

8－6．体育会系アイデンティティと文化資本

体育会系を自認する学生は，そうでない学生と比べて文化資本（cultural capital）の面で差異があるのだろうか．文化資本とはブルデューが提案した概念である（Bourdieu, 1979, 1986）．

ここでの仮説としては，体育会系を自認する学生は，文化資本において劣位にあるのではないかということである．スポーツ嗜好と芸術文化嗜好が両立する場合もあるだろうが，もしスポーツによる象徴的支配を受け入れた者が，すでにみてきたように男性支配的であり，権威主義的パーソナリティ

を持ちやすいとすれば，これは女性が好む芸術文化への嗜好性を減じる方向に働くのではないかという解釈ができる．すなわち片岡（1996, 2003, 2006）が論じたように，女性の場合，文化資本をもちいた社会的上昇移動や再生産が行われる傾向があるからである．女らしさの資本として文化的であることが望まれるとすれば，スポーツ嗜好の男性ほど男らしさの資本とハビトゥスを持ちやすく，それゆえ，文化芸術的な活動や読書活動には積極的ではないという仮説が成り立つ．

（1）読書の頻度と蔵書数にみる読書文化資本

読書の頻度を男女別・体育会系の有無別に集計した結果が図 18 である．図 18 に示すように，男子では体育会系アイデンティティ保持者と非体育会系アイデンティティ保持者で，読書頻度に有意な差は生じていない．しかし女子では，有意な関連があり，体育会系を自認する女子学生の 50.0％が「ふだんまったく本を読まない」と回答し，非体育会系自認の女子 29.4％より多かった．

蔵書数については，体育会系と非体育会系で男女ともに差異があり，0 ～ 5 冊ともっとも少ない蔵書数の者の比率は，男子体育会系の 43.4％に対し，男子非体育会系が 35.1％と低い．さらに女子体育会系では 49.4％が 0 ～ 5 冊の蔵書数で，女子非体育会系では 34.5％であった．

このことから，体育会系を自認する学生の蔵書数は少なく，読書経験も低いことが推測できる．

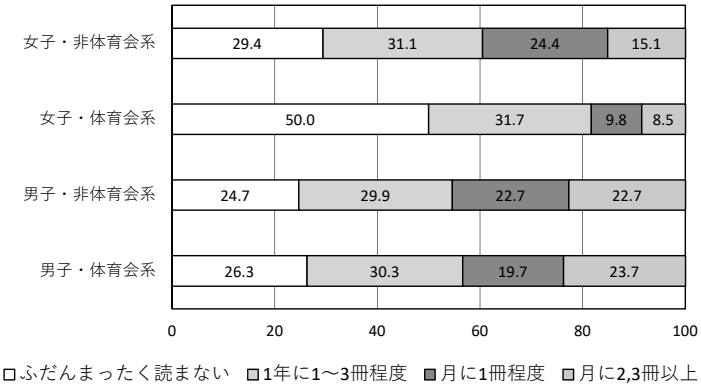

図 18　読書（マンガや雑誌除く）の頻度

（2）テレビ番組視聴にあらわれる文化資本

文化資本の程度は，テレビ番組の視聴にも表れる．体育会系自認の者が非体育会系よりもより多く視聴しているテレビ番組は，「スポーツ番組」「バラエティやワイドショー」である．逆に非体育会系のほうが有意に多かった番組は，「アニメ・マンガ」であった．また女子体育会系自認の者は，お笑い番組を好む傾向があることも明らかとなった．

9. 体育会系ハビトゥスとは何か

本稿では，体育会系アイデンティティを持つ学生について複数の側面から特徴をみてきた．この特徴とは，いいかえれば，体育会系アイデンティティをもつ者にとって，そのアイデンティティを構成している要素が何であるかという問題でもある．つまり「体育会系」学生のアイデンティティ・キットとは何なのかという問題である（片岡，2018）．

男子で体育会系アイデンティティの保持者は，保守的なジェンダー意識をもつことで男性支配的価値を強くもっていた．さらに，権威に従順で権威主義的価値観や伝統重視の価値観をより強く持っている．そして政治的な問題には無関心を示す傾向が強いが，権力志向については，集団のなかでリーダー性を発揮しており，かつ上をめざすという上昇志向な価値観や競争意識も強い．男子体育会系アイデンティティ保持者ほど，権力志向であるいえよう．

また男女ともに体育会系アイデンティティ保持者に共通しているのは，友人の数が多いことと，誰とでもすぐに仲良くなれるという社交性にあった．また男子体育会系ほど，多方面の友人と交流するという「柔軟なハビトゥス」がみられ，コミュニケーション能力も高い．そしてこの友人関係の多方向性こそが，男子において体育会系と非体育会系のアイデンティティ自認を分ける大きなポイントでもある（片岡，2018）．

他方で彼らは，価値観や考え方の合わない人とは付き合いたくないという異質な他者への排他性を示すことで，内集団と外集団を区別してもいる．おそらくスポーツ集団の中では，このような保守的価値観を持つことで，集団的同質性が保たれ，同時に互いを信頼しあう関係性が保たれていると思われる．しかし外集団との関係や異なる価値観を持つ人々への配慮や理解という点では，相対的に乏しい水準にあるということもいえる．

これらのことを総合して考えるならば，男子の体育会系アイデンティティ保持者とは，極めて日本的な集団主義のなかで，男性優位の支配を正当とみなし，権力を志向する傾向があるといえよう．彼らは上位の者への服従を示すことで，権威や権力を正当化しやすい．さらに性善説にたち人を信頼し，マスコミ権力や社会制度への信頼も高く，それを疑うことは少ない．それゆえ，社会制度の矛盾や問題点に気がつきにくいという「ナイーブな（naïve）」価値観の持ち主が最も多いという特徴を示した．ある意味，日本の支配的な保守層を体現するようなハビトゥスを持っているといえるだろう．

男子体育会系は，このように大学生集団の中で，比較的リーダー性を発揮し，パワーという点では支配的な位置にあると推測できる．しかし他の学生と比べて，男子体育会系自認の学生たちの文化資本が決して高くはなく，かつ支配的な体制や社会的権威を疑うことがあまりないという点で，他の文化資本の高いサブカル系やオタク，ストリート系などと一線を画しているのである．

また今回は分析の対象としていないが，同じデータで「知性派」や「ストリート系」を自認する男子学生の多くが，非体育会系として体育会系とは異なる卓越化戦略をとっていた．体育会系とストリート系や知性派など文化資本が相対的に高い集団との間では，集団内での権力（リーダー）をめぐって，学生間での象徴闘争が行われていると考えられる（片岡，2018）．体育会系自認の者は，スポーツ経験をもとに獲得した権威主義的価値や男性支配的な価値観をもって，その象徴闘争に参加しているといえるだろう．

体育会系アイデンティティを持つ大学生が，現在の日本の一部のスポーツ界で問題とされたような権威主義と男性支配的価値，保守主義を強く持っており，さらにコミュニケーション能力を武器にして，集団内で一定の優勢な立場の一翼にあることは，彼らが将来所属する組織での支配的な位置につくことを予想しての予期的社会化なのか，それとも単にそのように社会化されてきただけということなのかは，判別がしにくいが，おそらく両方が妥当するのではないだろうか．

注

1）ブルデューによれば，知覚・評価図式とはわれわれが世界を構築する際に用いている分類システムであり，客観的な構造と認知的な構造図式の関係性，言い換えれば無意識的に行っているカテゴリーの対象化に使用される認知構造でもある．

2）インターネット情報には，「体育会系な企業ランキング」というサイトのほか，体育会系企業の特徴についてのサイト（https://joblier.jp/feature/militaristic/）（2018 年 9 月アクセス）もある．

3）「リプセットは学生たちの間にみられる様々な差異を大学や学科のタイプといった要因のせいにしてしまい，彼らにおいては親の職業と本人の政治的立場との間にはいかなる関係もないと結

論しているが，これは単に，すでに他の場所でも示したように，ある時点における大学の位置づけの差異とは出身階層の差異が学校という場で現れたものにほかならず，しかもそれは将来への希望というレベルにおいてまで言えることである―なぜならどの学科を選ぶかという方向づけは，一定の出身階層の人々が一定の学歴上の成功を得ることについてどの程度の野心を抱きうるかということを表現しているのだから―ということを，彼が忘れているからばかりではない.」(Bourdieu 1979).

文献

ベネッセ教育総合研究所.（2009）第 1 回 学校外教育活動に関する調査 2009（データブック）.

Bourdieu, P.（1979）*La distinction: Critique sociale du judgement*. Paris: Minuit. 石井洋二郎訳. 1990.『ディスタンクシオン』I, II, 藤原書店.

Bourdieu, P.（1986）The Forms of Capital. in *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*. edited by John G. Richardson. Westport Greenwood: 241-58.

Bourdieu, P.（1998）*La Domination Masculine*. Editons du Seuil: France. 坂本さやか・坂本浩也訳, 2017『ブルデュー　男性支配』藤原書店.

Connell, R. W.（1987）Gender and Power, Cambridge: Polity Press. 森重雄・加藤隆雄・菊地栄治・越智康詞訳, 1993『ジェンダーと権力―セクシュアリティの社会学』三交社.

羽田野慶子.（2004）＜身体的な男性優位＞神話はなぜ維持されるのか―スポーツ実践とジェンダーの再生産―, 教育社会学研究, 75: 105-125.

飯田貴子・井谷恵子編.（2004）『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店.

伊藤公男.（1999）スポーツとジェンダー. 井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社.

片岡栄美.（1996 → 2000）ジェンダー・ハビトゥスの再生産とジェンダー資本. 宮崎和夫・米川英樹編,『現代社会と教育の視点』ミネルヴァ書房.

片岡栄美.（2000）文化的寛容性と象徴的境界―現代の文化資本と階層再生産―. 今田高俊編『社会階層のポストモダン』（日本の階層システム 5）東京大学出版会 :181-220.

片岡栄美.（2003）「大衆文化社会」の文化的再生産―階層再生産, 文化的再生産とジェンダー構造のリンケージ. 宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力　反射するブルデュー』藤原書店.

片岡栄美.（2005）文化定義のジェンダー化に関する研究：言説からみる文化活動への意味付与と性役割意識.『関東学院大学人文科学研究所報』29: 65-85.

片岡栄美.（2009）格差社会と小・中学受験 ―受験を通じた社会的閉鎖, リスク回避, 異質な他者への寛容性―, 家族社会学研究, 21（1）: 30-44.

片岡栄美.（2010）子どものスポーツ・芸術活動の規程要因―親から子どもへの文化の相続と社会化格差（学校外教育活動に関する調査報告書―幼児から高校生のいる家庭を対象に―（解説・提言編）.『研究所報』Benesse 教育研究開発センター編, 58: 10-24.

片岡栄美.（2018）大学生の自己アイデンティティと象徴的境界の基準―体育会系, オタク, ストリート系等の関係性マッピング.『駒澤社会学研究』51: 1-43.

Meyer, J.（1972）The Effects of the Institutionalization of Colleges in Society. Feldman, K.A.（ed.）, *College & Student*, Pergamon Press.

Meyer, J.（1977）The Effects of Education as an Institution. *American Journal of Sociology*, Vol.83, No.1.

中村晋介.（2007）「体育会系」女子学生のジェンダー観―「大学生のスポーツ・価値観に関する調査」より―『社会分析』34: 111-128.

西山哲郎.（1998）遊ぶ―スポーツがつくる『らしさ』. 伊藤公雄・牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社, 160-175.

Putnam, R. D.（1993）*Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*. Princeton University Press. =2001. 河田潤一（訳）『哲学する民主主義』NTT 出版.

Putnam, R. D. (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. Simon and Schuster. =2006, 柴内康文（訳）『孤独なボウリング―米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.
Putnam R. D. (2015=2017) われらの子ども　米国における機会格差の拡大. 芝内康文訳, 創元社.
数土直紀. (2013)『信頼にいたらない世界―権威主義から公正へ』勁草書房.
多賀太. (2001)『男性のジェンダー形成』東洋館出版社.
高井昌史. (2005)『女子マネージャーの誕生とメディア―スポーツ文化におけるジェンダー形成』ミネルヴァ書房.

※本研究は, 学術振興会科学研究費補助金, 基盤研究（B）代表 片岡栄美（平成 29 年度～ 31 年度), 課題番号 17H02597 の研究成果の一部である.